

故 川口 清神父とロザリオ



わたしが6歳の頃からです。子供の時から忘れられないことは、父が何かを求めて貪るがごとくどこかに行っていたことです。そして、ある日から突然、家族全員大牟田の教会に行くようになり、祈り、要理が始まりました。

1956年に家族6人洗礼を受けました。毎土曜日には、子供の公教要理を神父様がしてくださり、沢山の子どもたちが集っていました。その時間は苦痛の時でなく、楽しく分かりやすい例えを使って、よく話してくださいました。ある時には、ご褒美があり、それもくじ引きで……。神父様も一緒になって楽しんでくださったことが忘れられません。

ある日、父から「神父様が千恵子をくれ！」と言われたが……この言葉はわたしにとって、親から離れると言う大きな不安でした。

そして、あるとき父が病気で寝込んでしまい、神父様と伝道師の方がお見舞いに来てくださいました。わたしは、子供心に不安で逃げていたのに、父の枕元に家族全員集められロザリオが始まりました。その後、神父様は「千恵子、あなたは童貞様になりなさい!」。弟が、「僕は?」と言うと「康廣は、神父さんの靴屋さんになるか? 今日、きれいに磨いてくれたので」と。この予言は当たりました。

わたしと弟にとってこの呼びかけは忘れられない声で、深いところで確実に育ちました。この司祭の祈る姿、語る言葉は神様に対する敬虔そのものでした。その延長線が父でした。わたしの戴いた信仰の恵みは本当に恵まれた環境でした。

自分の将来を真剣に考えていた時、日向教会に川口神父様がおられることを知り、全く行ったこともない所でしたが、一人で走りました。1年4ヶ月程、お傍に置いていただき、ご一緒に食事もさせていただき、毎日のミサ、ロザリオ、霊的な話など、本当に有意義な時を過ごさせていただきました。この頃戴いたロザリオを40年以上過ぎた今でも使っています。

ある日の夜、祈りが終わって神父様とお話している時、「千恵子、わたしがもし迫害に遭って霊的なもの一つだけ持っていくことが許されるとすれば何を持っていくと思うか? わたしは司祭として祈りの本、聖書、ミサの用具等いろいろあるが、わたしは迷わず、ロザリオを選ぶよ。何故なら、マリア様に全てを託すから、マリア様は全て取り計らって下さるからだよ。」と。この司祭は本当にロザリオを繰って、食っていたかもしれません。人にもロザリオの近道を教え続けていました。わたしが今日、修道者として生きていく時、いろいろ選択しなければならない時、やっぱりこの司祭の言葉が響きます。そして、わたしもポケットの中にいつもロザリオがないと心が落ち着きません。

聖心のウルスラ宣教女修道会

シスター西川 千恵子